

続
アイデアに
商機あり

④

エコ和歌山

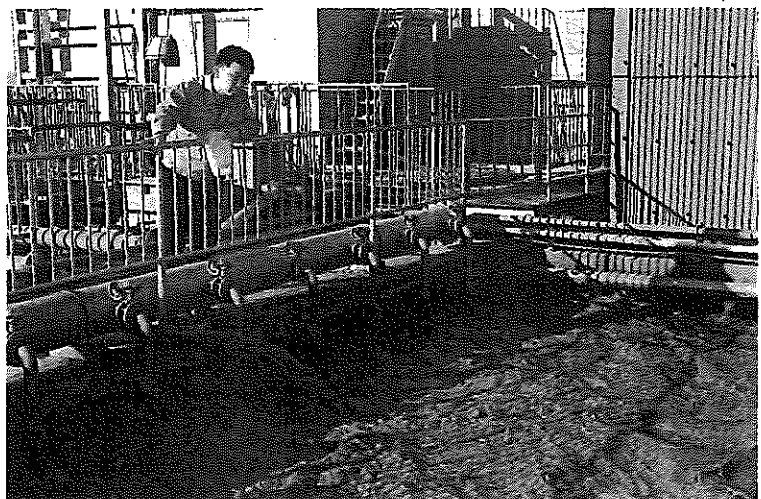
和歌山の魅力は、温暖な気候と自然の豊かさにある。けれども、地域の産業や人々の営みが活発になれば、その分、汚れが増える。田辺市稲成町の「エコ和歌山」はその循環を食い止める、和歌山の水と環境を守ることをなりたいにし、県内の資材を使った浄化槽で地域の産業から出る排水を浄化している。

「地元ならではの排水処理システムをつくろう」。2011年2月に社長になった中田祐史さん(44)は、就任直後から社員に呼び掛

け、和歌山市の県工業技術センターなどに協力を求めて浄化槽の開発に挑んだ。

まず考えたのが、浄化槽の中で汚れ成分を食べる微生物をできるだけ多く繁殖させること。そこで微生物がうまくすみつき、繁殖できるように橋本市で生産されるパイル織物を使った。食品会社向けに、槽内の温度や送り込む空気などを管理する浄化槽も造り上げた。

実証実験では、排水処理の過程で発生し、産業廃棄物となる「余剰汚泥」を8割以上削減することに成功した。汚れ成分を極限まで生物に食べさせる仕組みに



梅加工会社の浄化槽を点検する中田祐史さん
(みなべ町山内で)

環境守る独自の排水処理

こだわり、通常ではなかなか発生しないイトミシズを

多く繁殖させ、微生物が活動するパイル織物を導入した成果である。工夫を取り入れ、大手の同業他社が製造する浄化槽よりも費用を

安く抑えることに成功した。

こうした取り組みが評価され、2年前には、県の「わかやま環境賞」を受賞。1年前には自然の英知を活用した産業技術に贈られる「第3回ネイチャー・イノベーション・アワード」(大阪科学技術センター主催)の技術開発委員会賞に

輝いた。

受賞を機に、地元からの注文が増えている。紀南地方の梅干し加工会社や魚の食品会社、地ビール会社からの注文には、それぞれの会社にあったオーガメードの浄化槽を仕立てている。

中田社長はいま、もう一つの工夫として、産業廃棄物となる梅干しの種を燃料に利用する方法を模索している。

「地元の資源を使ったオーガメードの浄化槽で、地元特産品の加工場から出る排水を浄化して川や海に返す。環境面では研究したいことがまだまだ山のようにあります」と話す。

【メモ】田辺市内の水道工事会社5社で1992年に協同組合を設立。2004年に株式会社に変更。従業員26人は全員正社員。定年退職まで全員が幸せに勤め上げられることを目標にしている。